6月18日　使徒言行録４章５～１２節　今日の説教から

説教題：「洗礼一日三千人、弟子は万里を走る」

今日の聖書個所には、「隅の親石」という言葉が出てきています。これは家を建てる際に隅に置く、「最も多くの石の重さが集中する石」のことです。そのように石が家を支える様子を、イエス様がこの世を支える土台として、そして何よりも教会を支える土台として神様に遣わされてきた事をたとえている言葉なのです。

ただ、この「隅の親石」なのですが、他にも「要石」として翻訳することが出来る言葉だそうです。要石とは石造りの橋の頂上に置く石であり、その石を置くことで左右からの力がつり合い、橋が完成することになります。この裏面下部分に、要石の説明を載せています。

この画像のように、時にその上にさらに石が幾つも敷かれて、丈夫な橋が出来上がることになります。建物を支える石としてだけではなく、石橋を支える要石としてイエス様がたとえられているのだとしたら、それは何と何をつなぐ橋なのでしょうか。それはやはり、私たち人間と神様の間をつなぐ橋なのでしょう。人間と神様は、かつて楽園でともに暮らしていた時代は、親しい交わりの中にありました。しかし、アダムの方からその交わりを拒絶してしまい、神様の言いつけを守ることなく、自分の欲望を満たすことを選びました。その瞬間から人間は神様と共に生きることができなくなってしまったのです。

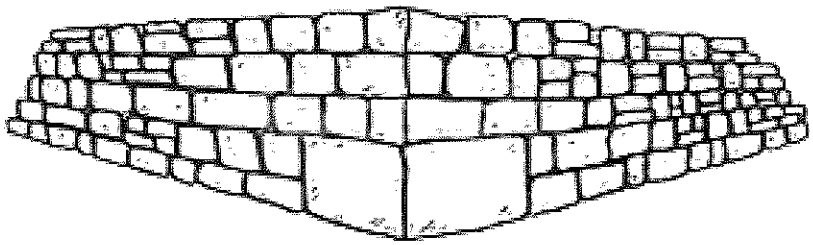
いま、私たちは神様と共に生きることがゆるされています。それはイエス様が私たちと神様の間の懸け橋になってくれたからにほかなりません。ユダヤ人たちは、焼き尽くす捧げものを燃やすその煙によって、神様に思いを届けていました。いま私たちは、十字架にかかったいけにえの子羊であるイエス様によって、そのイエス様が永遠に燃え尽きない捧げものとなったことによって、神様との間の永遠の絆を取り戻すことができているのです。そして、その「イエス様の名」によって、私たちはいつでも神様に祈りを捧げることが出来るのです。その意味において、イエス様が私たちのための、神様との間の仲保者、懸け橋の要石であることは間違いないことなのです。

今日の個所で引用されている、イエス様のことをたとえた「あなたがた家を建てる者に捨てられた」というこの「捨てる」という言葉は、「必要かどうか吟味してから捨てる」という取捨選択の意味よりも、私たちが生ごみに向けるような目線によって、「嫌悪の意思によって捨てる」という感情が込められている言葉だそうです。それほどまでにみじめな思いをして、人々の罵倒と批判にさらされて、病と怪我によって見る影もない姿になってまでも、私たち人間を罪から救うために、イエス様は十字架へと進んでくれたのです。神様のことを中心に考えるのではなく、自分の利益のことを優先してしまう、その罪から救い出すために、イエス様は十字架へと進んでくれたのです。

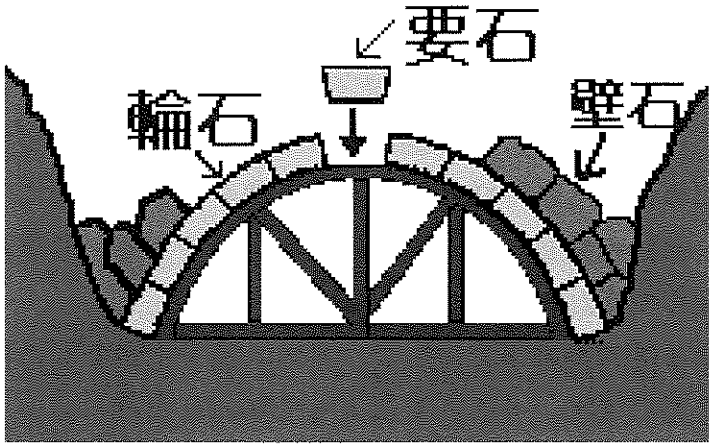
今私たちは復活のイエス様の栄光の中で、イエス様を土台とした神様の御堂の中で、礼拝を続けることができています。イエス様によって結ばれた絆によって、神様とのつながりを実感することが出来ています。その喜びを胸に、今週一週間の歩みを、これからの歩みを共に進めていきましょう。

今日の説教箇所：使徒言行録４章５～１２節

- 5:次の日、議員、長老、律法学者たちがエルサレムに集まった。大祭司アンナスとカイアファとヨハネとアレクサンドロと大祭司一族が集まった。そして、使徒たちを真ん中に立たせて、「お前たちは何の権威によって、だれの名によってああいうことをしたのか」と尋問した。そのとき、ペトロは聖霊に満たされて言った。「民の議員、また長老の方々、今日わたしたちが取り調べを受けているのは、病人に対する善い行いと、その人が何によっていやされたかということについてであるならば、あなたがたもイスラエルの民全体も知っていただきたい。この人が良くなって、皆さんの前に立っているのは、あなたがたが十字架につけて殺し、神が死者の中から復活させられたあのナザレの人、イエス・キリストの名によるものです。この方こそ、／『あなたがた家を建てる者に捨てられたが、／隅の親石となった石』／です。ほかのだれによっても、救いは得られません。わたしたちが救われるべき名は、天下にこの名のほか、人間には与えられていないのです。」



隅の親石



要石